

も感じられず安心した。行くたびに大都會の発展には眼を見張るが田舎は昔のままだ。貧富の差が将来の問題になると痛感した。仲間の中には帰国せずそのまま現地に残った人もいたが、消息は判らなかつた。

私も復員後農業を営んできたが、昭和三十九年から昭和五十八年まで森林組合に勤め、今は家内と二人暮らしでいる。

いつも山西省で戦病死した将兵のことが気にかかり、また、私の山西省残留の身分も不安定のままだ。

今も一日も早く、解決するよう微力を尽くしている。

私の戦中、

戦後の労苦思い出

京都府 小 島 嘉 晴

(旧姓 内藤)

私は昭和十九(一九四四)年兵であり軍隊生活は本当に短くありましたが、戦後の苦労は口や筆には尽くせぬものがありました。

郷土の小学校を経て京都市立工業高校に学び、卒業後は当時の鉄道省に奉職、大阪鉄道局京都保線区技術員として拜命を受け、安全輸送の要である保安業務に携わりました。当時の保線は総て人力に依るものであり危険も多くありましたが、列車を無事安全に走行させるための重要にして不可欠の仕事でした。業務に必要な知識や技術も積極的に修得し、それを日々の職務に反映させていました。

当時の日本が国運を賭けた大東亜戦争の最中、しかも開戦当初の快進撃とは裏腹に、物量に勝る連合軍の猛攻により戦局が悪化の一途を辿っていた時期で、国の行く末を憂い、昭和十九年三月徴兵検査を受けて甲種合格となりました。

同年九月一日、京都伏見第三十七部隊第八中隊（歩兵通信隊）に現役兵として入隊しました。一週間後に、中支派遣軍「嵐」部隊の要員として中国へ向かって京都駅を出発しました。

その出発の際に、知り合いの国鉄職員や京都保線区の友人や国防婦人会など多くの皆々様から「元気で帰ってらっしゃい」との見送りを受けて京都を後にしました。瀬戸内海を左に見て、途中で広島島の厳島神社の海中に建つ鳥居を眺めながら下関に着きました。ここで直ちに乗船し釜山港へ向かいました。

海は荒れて船に酔う兵隊もいましたが、数時間で釜山港へ上陸し、そこからは鉄道の特別列車で

張店へ向かう。この列車の速度は遅く、停車する駅はなく、奉天（瀋陽）そして山海関は昼間に通過し、万里の長城付近も遠望できました。さらに走って天津、済南、泰安を進み張店に到着しました。

ここは歩兵第三十二師団本部の所在地「衣」旅団司令部の中に「衣」部隊があり、赤いレンガの立派な建物の兵舎が並んでいました。長谷川中隊長の歓迎の言葉を頂き、今日から兵隊さんになった気がしました。

私たち初年兵四十人は二班に分かれて内務班に入りました。最初に一、二班それぞれの内務班長さんの紹介があり、一班長は森田軍曹、二班長は中島軍曹との紹介がありました。続いて班毎の初年兵の教育係り兵長や助教員の紹介がありました。

その日の夕食から初年兵が飯上げを行うことになりました。もちろん班付兵長の指導のもと行うものですが、私が班長当番に当たり班長室へ食事

を持って行く際に、班付兵長さんより「上官の飯を持って行く時は、自分の口より上に高くお膳を上げて持ってゆかねばいけない。持って行った飯に初年兵の息がかかって失礼になる。以後気を付けよ」と注意されました。「お前達は氏子のお宮様で、出征兵士の武運長久を祈願してきたであらう。その際、神社の宮司は自分の息がお供え物にかからぬように、しやくの板のようなものを口に当てて、お供え物を神様にお供えされたであらう。それと同じだ、注意せよ」と言われました。

それから食事が済んだら掃除、洗濯と忙しい軍隊生活の毎日でありました。

この部隊には関東方面の人が多くおり、特に言葉が解りにくい。また京都の兵隊は生やさし過ぎで、彼らには通じにくいことが多くありました。再度聞き直すとさらに叱られる、ということでした。

軍隊は階級がものを言うのです。私達は歩兵通

信であり、毎朝「イトウ」「ロジョウ」「ハーモニカ」などの通信語の勉強及び手旗信号の振り方等の訓練があり、毎週土曜日にはこれらのテストがありました。私は皆について行けなくて困ったものです。

軍事教練や射撃、行軍、号令等については自信がありました。これらは中学校や鉄道青年訓練所で教育を受けて来たのであまり苦には思わなかったのです。

一期の検閲が間近に迫った、その十日前に、森田班長から呼び出しを受け、何を言われるのかなと思いつつながら班長室へノックして入りました。班長さまは、にこっと笑って「君は剣道の二段を持っていてるようだが、自分は三段を受けて間がないんだ。放課後広間で練習をしよう」と誘って下さいました。手心を掛けず真剣に取り組んだのですが、余り大差はないように思いました。剣道をやることによって班長さんから可愛がって貰うことになりました。

ある日の日曜日には再び班長さんから呼び出しを受けました。「今日は君に外出を認めて、一緒に、この町で日本人が経営しておる食堂に案内しよう」と誘って頂いた。その食堂の主人は非常に感じの良い方で、話も通じるので、京都の事や大阪の事等を話合っている内に心安くなり、中国の銘酒「チャンチュウ」を頂きました。飲み心地が良く中国料理も頂いて本当に楽しい一時でした。中隊の兵舎に帰る途中には足がふらつき、目眩がしそうになっていました。兵舎に帰着した時に急に倒れて、中隊の内務班の古兵さんから叱られ、恥ずかしいことをしました。

初年兵として一番大切なこの一期検閲の前に、森田班長さんにも申し訳がない。今日まで頑張ってきたことが水の泡だ、と心配していたところ、一期の検閲が終わって森田班長さんからは「よく頑張った。君は一先発の上等兵に進級する事になっている」と言つて励まして下さいました。班

長さんを神様のように思つて感謝しました。それから一週間後に人事係の准尉さんから下士官候補の教育隊へ行くようにと薦めて頂いて、私も了解し入隊しました。

行つてみると通信隊の出身者は私だけであり、一番最低の成績であつたであろうと思うが、どうにか合格しました。

三カ月余り教育を受けて、下士官の辞令を頂いて間もなく、嵐部隊第百九連隊第二大隊第八中隊へ転属の命令があり、伍長勤務兵長として嵐部隊を追及しました。その第八中隊では、同じ園部町出身の西田兵長と出会いました。まるで自分の兄に会つたような思いで本当に懐かしく思いました。

私は第八中隊の初年兵教育の助教を命ぜられ、その教育の任に当たりました。私と同年兵ばかりであり、最初から積極的な教育はできませんでした。作戦指導の中沢上等兵から「野戦へ来たなら、今日は無事であつても明日は死ぬか、生き残るか

判らない。それが野戦だ。何の遠慮もいらぬ班長代理として厳しく教育せよ」と注意を受けたこともありました。

六時に起床して、各個教練の朝の三十分であった。内務班へ帰ると朝食の準備をし、食事が終わってから陣地工作の作業である。ツルハシ、スコップを持って中隊の兵舎の裏山へ行き、四十五分間作業を行い、十五分の休憩をとるという作業で、四〇〇メートルの高さで陣地を計画しました。

兵隊の中には学徒動員できている者や、会社勤めのサラリーマン、商売をしている者等様々で、こんな土方作業の経験を持った者は全く無い。しかも暑い真夏の六月頃であったので本当に辛かったであろうと思います。それでも一カ月程で陣地は完成しました。

その後、大隊本部から突然、この部隊には憲兵の兵隊が少ないから、私に憲兵志願をするように

と命令があり、身分調査も終わっているのので、その準備をするようにとの指示がありました。

そして昭和二十年二月一日から南京の憲兵学校に入学することになりました。身体検査と学科試験では軍人勅諭を暗記し別紙に記入しました。そして依頼部隊から初年教育の成績表や下士官候補の成績書が届いていましたので割と簡単に合格しました。

憲兵学校では、特に軍人教育の基本法や中国語の勉強が主体でした。昭和二十年五月末日に卒業し、六月十五日「嵐」部隊第百九連隊付憲兵分隊に配属されました。

分隊で私の歓迎会をすることになり、「私の歓迎会だ、金の調達は私がする」と言って、三人の下士官に「お前は酒だ、お前は野菜と肉を買って来てくれ、料理の上手な兵隊は買ってきた材料で夕食までに料理を作りなさい」と指示した。そして夕食に全員の兵隊が会食するのですが、結構料理の上手な兵隊がいて夕食が待ち遠しかったも

のでした。

その下士官室の隣の部屋が中隊長の部屋になっており、その料理の匂いが中隊長室に筒抜けとなり、酒好きな中隊長が下士官室に入って来て「金は出すから僕も仲間に入れてくれよ」ということになりました。この部隊に配属になってきた私は、その場で中隊長に「新米の兵隊です、今後何かとお世話様になりますので、どうかよろしくご指導とご愛情を賜りますようお願い申し上げます」と簡単な挨拶を済ませました。そして、その歓迎会も和やかな雰囲気の中に閉会となりました。

私は憲兵隊の兵隊さんは怖い人達ばかりだと思っていました、人情味のある立派な方々ばかりだと思ひ恐縮しました。軍隊に入ってからこんなことは初めてであり、大変嬉しく感じました。

私の初年兵教育の後に、下士官候補生として、さらにまた憲兵隊志願等がありました、この間戦局はますます悪化してきました。

昭和二十年二月、米軍はクエゼリン島を攻撃し、同島の我が守備隊は玉砕。さらに同月、トラック島が二日間にわたって米軍機の激しい攻撃を受け、海軍基地としての機能を喪失しました。

七月にはサイパン島が陥落、日本の絶対国防圏の一つは崩壊しました。マリアナ諸島が敵の手中に陥落するや、日本本土は、米軍機の熾烈な空襲にさらされることとなりました。戦局悪化の中ひたすら軍務に精励したのですが、昭和二十年八月十五日には遂に終戦となりました。我々は当時、寶慶の戦地の弾薬庫の警備や地域の巡視の任に当たっていました、終戦になったことを知り、憲兵隊は分隊へ帰着しましたが、終戦とは全く夢のようで、信じようとしても信じられず、呆然とした者ばかりだったのです。

中国軍の指示命令を受けて嵐部隊も武装解除され、武器や弾薬等を返納し、本当に情けない思いでした。

昭和二十年十一月頃、歩兵の部隊は南京方面に向かつて出発したのですが、我が分隊は残務整理のためその場に残り、巡視や捜査を続けましたが、我々日本軍が敗戦になったことを知り、中国人も大きく態度を変えました。

憲兵隊が借りていた兵舎も住むことができず、このため公園や橋の下でテントを張って、警戒や出役作業の重労働をするという日々でした。そして給与は悪く栄養失調の兵隊が始め、病院へ入院する者が日増しに多くなってきました。

私はお陰様で健康であったので、中国人の農家へ行き、言いつけられる作業を終えると食事を与えて貰えるということでした。その上、体の弱い兵隊のために何か土産に欲しいとお願ひして、芋や大根などを貰って来て、皆で分けあって食べると言った情けない状況でした。

昭和二十一年七月、中国軍から指示された作業もほとんど終わりとなりましたので、いよいよ貨

物列車に乗車して南京方面に向かつて出発しました。

南京の広い練兵場に集結し、我々の身体調査や中国人からの検閲があり、朝九時から午後五時頃まで、「日本軍の最後の部隊が日本へ帰国する。住民に悪いことをした者がいたら指をさせ」との命令が出たため、何千人とも数え切れない中国人が行列になり、一人一人が我々をのぞき込んで、確認しながら順次前に進んで行くのでした。

もしも間違つて、この人だと指さされたら直ちにジープに乗せられて詳しく再調査される訳です。その時は生きた心地にはなれなかったのです。そんな厳しい検問も終わりました。

昭和二十二年二月十日、伍長に任官されました。そして昭和二十二年五月、いろんな苦勞をして南京から列車に乗って上海まで無事到着しましたが、私は栄養失調のため入院せねばならない身となりました。同じ死ぬなら親兄弟の顔を見て暈の上で死にたいと病院船に乗り、九州の佐世保に

上陸しました。

佐世保での一カ月余りの病院生活で、ある程度健康が回復したので退院の手続きを終えて、私の誕生日である七月十日に復員しました。その時の私の身分は補助憲兵軍曹となっていました。

私の実家までは園部駅から約四キロ余あります。私が出征する時には兄が園部小学校で教師をしていましたので、復員して園部駅に着いた旨を電話で連絡しましたが「今は、授業中であるので三十分後には必ず園部駅まで迎えに行く」との事であったので駅に荷物を置いて待っていました。

家に帰る途中で私と一緒に入隊した戦友の家を訪問しました。元気でいるだろうと思いつつたところお母様が「お帰りなさい。私の息子は中支で戦病死し、昭和二十一年八月に公報の通知があった」との事で、悪かったなと思ながらも仏様にお参りさせてもらって帰路につきました。

戦中、戦後の苦労は多くありましたが、このよ

うに栄養失調であるけれども生きて帰れたこと自分の幸せを感じました。

我が家に着くなり三年ぶりの風呂に入り、体を清めて先祖に「只今、帰って参りました」と報告しました。その後、近所の方々にも帰ってきた姿を見てもらおうと挨拶回りをしましたら、皆さんからは「その体では働く事を考えずに、まず充分に養生するように」と励ましてくださいました。

その後は自宅で、一カ月程度養生していますと、おかげ様で健康な体に回復しました。そして職場復帰ができるようになり、大阪鉄道局や京都保線区事務所へ復員した旨を報告し、職場復帰のお願いに行つたところ、軍隊経験について人事課長から詳しく尋ねられ、援護局からの書類を見せられ、五年間休務する事に決意しました。

昭和二十五年二月十六日に小島由五郎氏と養子縁組となり、妻むめのと結婚しました。したがって姓は内藤から小島に改名し小島嘉晴となりました

た。

若き六十年の思い出

秋田県 小畑 忠 治

私は、大正八（一九一九）年九月十七日生まれの満八十二歳です。軍隊に入営する前の昭和十（一九三五）年から十四年までは青年学校や青年団活動にも積極的に参加しました。当時は、支那事変（日中戦争）も中期にかかり、戦没者なども多く出つつあり、農村においても満蒙へ開拓のための話がだんだんと高まっている頃でありましたから、我々も、安穩として、この青少年時代を過ごしてはならないと、心に感じておりました。

したがって軍隊に入隊する前の、昭和十年から十四年までは青年学校や青年団活動にも積極的に参加しました。

昭和十三年には、二井田青年団の代表として、小畑勇君と二人、秋田県の護国神社建設地の地均しの奉仕作業に、土崎の小学校に一週間程泊まりがけで参加致しました。私達も勇君と戦地に行き、もしも戦死するところに建設される神社に祀られるのだと話し合ったものでした。その勇君は昭和十六年に入隊し、南方にて戦死され、今は護国神社に祀られています。

私は昭和十四年徴集で、昭和十五年二月、現役の騎兵として盛岡の騎兵連隊に入隊しました。

当時は支那事変の最中であり、村から従軍しておる兵隊の中でも、何人かの戦死者が出ておる時でありますので、私達も戦地の支那へ行くのだからと覚悟して入隊したものでした。

家を出る時は、家族、友人、部落の多くの人々の「万歳！ 万歳！」の歓呼の声に見送られて、四キロ程の砂利道を扇田駅まで歩いて行き、騎兵隊に入隊しました。騎兵隊の本隊は満州に行っておるということで、ここは留守隊だけで、私達が